

第2回 生活科研究部研修会

『気づきの質を高め、一人一人の成長につながる生活科授業の創造』

令和6年8月1日

講話「対象とのかかわりを深め、自分自身の成長につながる生活科授業の創造

～気づきの質が高まる学びのストーリーの構想を中心に～」

愛知教育大学 加納 誠司 教授

浜松の生活科教育でこれからの授業は、以下の5点が重要となる。

- ①子どもの**生活（興味・関心）**から学びをつくり**願い**を生みだす授業
- ②豊かな体験から個の思いや考え、**願いを表出**させる授業
- ③表出した個の探究を伝え合う・話し合っ**て思考を往還**させる授業
- ④よりよい考え（最適解）を再構築し新たな価値を**活動（遊び）へ深化**させる授業
- ⑤子どもの生活や地域や自然から**学びを創り、生活や生き方へ生かす**授業

このような授業を実践していくことにより、自己の学びを表出し思いや考えを生活の中で発揮する子どもが育っていくことを期待する。



〈実践紹介〉

事例1：「名古屋の学びのコンパス、探究心が核！」

名古屋市立常磐幼稚園・常磐小学校 つながるプロジェクトの実践

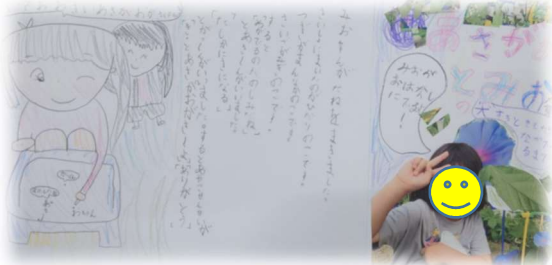


幼稚園児と小学校児童たちと交流する機会を設けている。

小学校の運動会などの行事にも参加している。園児たちにとって、年の離れた小学生とコミュニケーションをとる貴重な経験になっている。

事例2：1年生活科「アサガオ絵本」で学びの自覚化を図り学びのストーリーとしてつなげる

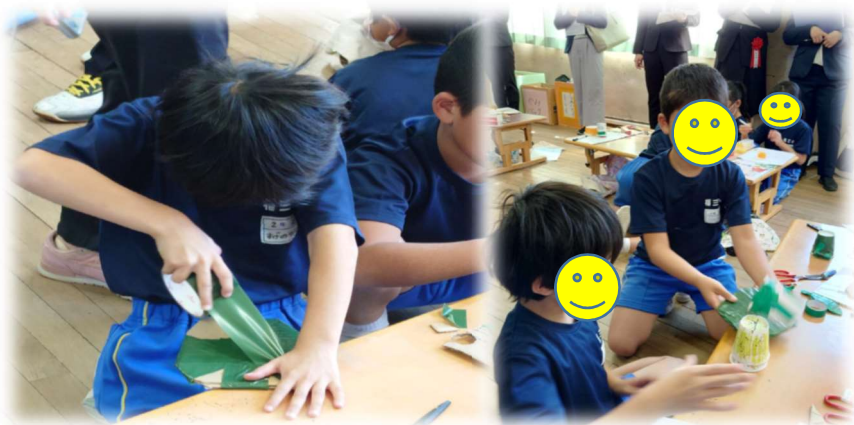
瀬戸市立にじの丘学園の実践



「自分が育てているアサガオで絵本をつくる」

一年に2回アサガオの栽培をし、長期にわたる大単元から、子どもが対象との対話を繰り返し自分の成長を実感していく学びのストーリーが出来上がる。

事例3：単元での子どもの見取り 福島第三小2年生活科「おもちゃ」の実践



子どもの独創的な発想が教師の想定を超える姿を生むために、いかに子どもの**自律学習力**を信じて**遊びが創り出される**まで待つことができるかが課題である。



事例4：1年生「わく！どき！ふしょうツアーズ シーズン2」

愛知教育大学附属名古屋小学校の実践

教師の「**でば**」の効果进行分析し、「自分自身の成長につなげる生活科授業の創造」ために、日々研究を行っている。

話し合い活動における教師の役割は、子ども主体の話し合いであっても教師は授業に関与し話し合いをよりよい方向に導くようコントロールすることである。

実践発表1

「身近な生活にかかわる見方・考え方」を生かした生活科授業の創造
～1年「たのしい あき いっぱい」の実践を通して～

城北小学校 佐々木 琳 教諭

「たのしい あき いっぱい」の単元を通して、人や自然物と主体的にかかわってつながるために、自然と触れ合う時間や自然物を使って遊ぶ時間を十分に確保し、自然物を使って遊ぶ楽しさに気付くようにする。そして、自分が楽しかった経験を友達に伝えたいという思いから、友達同士で遊んだり、隣のクラスと交流したりすることで、主体的につながり合うことができると考えた。また、次の活動につなげるために「こんなことをしたい。」という思いをもつことができるよう、子供たち自身で、活動を考えさせるような環境設定をしていくこととする。



《実践》

(1) 自然とのかかわりを深めるための導入と環境設定

単元の導入として、まずは身近な校庭で秋見つけを行った。次に「学校にはない秋を見つけよう」というめあてをもって学校の近くの公園へ出掛け、どんぐりや松ぼっくりなどを集めた。校庭の自然物との違いに気付いたり、夏との違いに気付いたりする子供もいた。秋見つけを十分に楽しみ、様々なことに気付いた。

さらに、秋の自然を感じるができるよう、廊下に自然物を種類ごとに分けて置いた。どんぐりにも色々な種類があることに気付いたり、自分が作りたいものに合う大きさや形の自然物を選んで試したりすることにつながった。

(2) 自然物と十分にかかわる場の設定

授業で拾ってきたどんぐりと松ぼっくり、落ち葉で遊ぶ場を設けた。自然物と十分にかかわることが次のおもちゃを作って遊ぶ活動につながった。

(3) 友達へ伝え合う場の設定

作りたいおもちゃをイメージした後の活動では、自分たちで机を動かしてグループで会話しながら作っていた。このように友達とかかわり合う場面が教室の至る所で見られ、45分の授業が終わるころには、協力して作業したり一緒に遊んだりする姿が見られた。

(4) 相手意識と目的意識の共有

おもちゃを作った後、2年生から「他のクラスの友達に見せたい。」等の意見が出た。今まで学級の中だけで楽しんで活動から、対象が学級から外へと広がるよう、「隣のクラスのみみんなに楽しんでもらうためにはどうしたらよいか考えよう。」というめあてを設定し、学習を進め

た。

目的意識を全体で共有することで、進んでグループの友達や秋の自然物とかかわる姿が見られた。

（5）立場を変えて遊び合う場の設定

単元の最後に学年全体で、それぞれの学級を半分ずつの人数に分け、作ったおもちゃで互いに遊ぶ活動を行った。立場を変えて遊び合う場を設けたことで、相手の立場に立って考え、お客さんに気持ちよく楽しんでもらうための工夫をする姿が見られた。

《成果と課題》

- 「秋見つけ」の活動を校庭と公園の二か所で行うことで、子供たちが秋の自然物をたくさん集め、秋の自然に十分にかかわることができた。たくさんの種類の自然物で遊んだり、おもちゃを作ったりすることを繰り返す中で、思考が深まり、気付きの質を高めることができた。
- 毎時間の授業の中や、校外学習でのグループ活動から一緒に「秋見つけ」をした経験を生かして友達と自分から伝え合うことができた。互いのよさに気付いたりすることで、気付きの質が高まっていると感じた。
- 相手意識と目的意識を共有してグループで話し合う中で、子供たち同士の気付きや今までの学習で経験してきたことをつなげて話し合う姿が見られた。
- 自ら遊びを創り出し、遊びを身近な人々に向けて表現することを目標としたが、1年生の子供たちにとって、遊びを創り出すことはできても、相手意識を持って表現することは難しい子供もいた。相手意識を持たせるためには、どのような支援が有効であるか検討する必要がある。
- 子供の行動や表情の観察だけでなく、「うれしかった」「よかった」ことをワークシートに記入するなど、形に残るものがあると、より子供の思いを見とることができるのではないかと感じた。

実践発表2

進んで考えかかわり合う中で、気付きの質を高めることを大切にした生活科授業の創造
～2年「たんけんはっ見 中ごおり」の実践を通して～

中郡小学校 浦部 草号江 教諭

「大好きな中郡のまちを知ってほしい！」という発表のゴールを設定し、再度学区探検を行うことで、児童が進んで考え、友達や地域の人とかかわれるのではないかと考えた。最初の探検での気付きを地図を使ってまとめたり友達と情報を共有したりすることで、気付きの質を高め、更に次の探検へとつなげていく。主体的に活動に取り組もうとすることと、気付きの質を高めることは相乗効果として児童の深い学びにつながるのではないかと考えて、本テーマを設定した。



《実践》

(1) 子どもの願いを大切にしたい単元構想の工夫

単元計画では、全体を3つ（つかむ、深める・広げる、伝える）に分け、それぞれで「思いや願いをもつ」→「活動や体験をする」→「感じる・考える」→「表現する・行なう」という学習過程をくり返した。

思いや願いをもとに学習を進め、活動することで生まれた気づきが次の思いや願いにつながるように単元を構成したことで、目標をもって学習に取り組むことができた。

(2) 子供の見え方のものさしを広げる工夫

2年生の学習では、1年生を案内する学校探検を5月に行った。1学期後半で学区探検を行い、活動範囲や関わる人が広がった。2学期の学区探検では、目的をもって質問することでさらに地域の人との関わりが深まった。

(3) 教科横断的な学び～知識技能の活用

本単元に関わる他教科の学習として、道徳、国語科、音楽科がある。道徳「およげないりすさん」の学習では、相手の状況や気持ちを考えたり想像したりすることの価値について学び、グループ行動や地域の方の思いを想像することにつながった。

(4) 気づきの質を高めるための、伝え合い・交流する場での工夫

探検後、調べて分かったことをグループで伝え合った。探検した場所の写真を提示しながら発表することで、聞き手に分かりやすく説明することができた。また、説明の前に、気付いたことや初めて知ったこと、驚いたことなどをメモしたので、どんなことを見つけてきたのか明確にすることができた。発表したことについて話し合う活動では、質問に答えていく中で、自然と気づきの質を高めていくことができた。また、少人数のため、質問や意見が言いやすく、活発に話し合うことができた。

《成果と課題》

- 地域の方と学習の目的を共有し、単元計画を作成したり、探検ルートを考えたりしたことで、地域全面協力のもと、中郡オリジナルの活動を展開することができた。
- 学区探検→気づきの交流→願いや思い→学区探検→の学習サイクルを何度か繰り返すことで、子供たちの気づきの視点を広げ、気づきの質を高めることができた。
- 学習することで、中郡のまち全体への理解が深まり、地域への愛着が高まった。「
- 質問を事前に用意したり、話型を練習したりすることで、地域の人との交流ができるようになった。
- 児童の思いや願いにできるだけ沿った活動をしたいが、より主体的な活動につなげるためには、どのような形態をとるのがよいのか考えていきたい。
- グループでの活動が苦手な子供が多く、支援が必要なグループがいくつかあった。様々な場面でグループ活動に取り組み、子供たちができるだけ自主的に学習を進められるようにしていきたい。
- グループでの活動では、一人一人の見取りが難しい。子供の願いに沿った主体的な活動を計画しながら、個に合った支援や評価をどのようにしていくのが課題である。

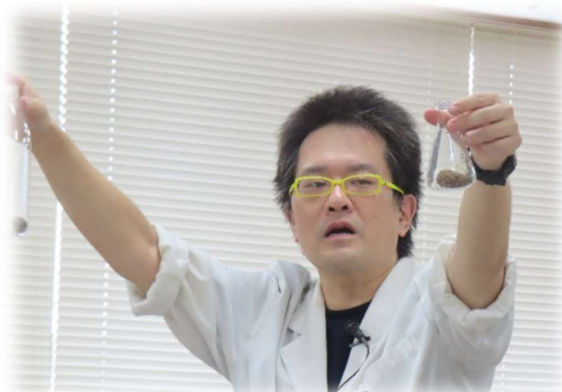
実技研修 「生活科の授業で使えるおもちゃづくり」

浜松科学館 チーフエドゥケーター うえちゃん 氏

午後からは、はままつ科学館「みらい〜ら」の、黄色いメガネがトレードマークのチーフエドゥケーター「うえちゃん」こと上野元嗣氏を招聘し、「生活科の授業で使えるおもちゃづくり」と題して、実技講習を行った。終始、笑いと驚きに包まれた半日であった。



うえちゃん登場！



超能力も披露



「色いろピンゴ」



「どんぐりピーコロ」



「牛乳パックであそぼう」



「超簡単！ホバークラフト」